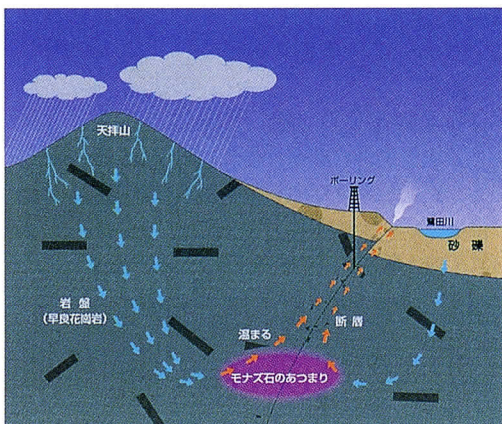


# 筑紫の古湯 二日市温泉

## ■二日市温泉の熱源

九州の中央部には霧島火山帯があるため、多くの温泉に恵まれています。源泉は9,500ヶ所以上あるといわれており、数の上では九州3県が全国の温泉ベスト5に入っています（環境庁自然保護局施設整備課作成資料／平成10年3月）。まさに温泉の宝庫といえるでしょう。そのなかにあつて、二日市温泉は「放射能泉」という珍しい温泉です。この種の温泉は、九州では玉名・日奈久（熊本県）、堀田（大分県）、弥次ヶ浜（鹿児島県）などがあり、全国的には三朝温泉（鳥取県）、増富温泉（山梨県）が有名です。

では、放射能泉とは、どのような温泉な



二日市温泉のしくみ

のでしょうか。筑紫野市周辺には、約9千万年前にできた「早良花崗岩」が広く分布しています。この岩には、ウランを含有したモナス石という鉱物が多く含まれています。ウランが、ラジウムやラドンに変化していくときに出る熱で、鷲田川付近の地下水が暖められ、地上に湧出したのが二日市温泉です。

## ■温泉の効能

原爆の悲惨な体験をもつ日本人は、“放射能”と聞いただけで、つい危険な印象を抱きがちです。しかし——、心配はいり

ません。微量の放射線は、大量の地下水によって希釈されていますから、人体への悪影響は全くありません。それどころか、切り傷・やけど・皮膚病・動脈硬化症・神経痛・関節痛・リウマチ・糖尿病・痛風・冷え性・不妊症など、“万病に効く”といわれるのが、放射能泉の特徴です。切り傷によく効く温泉は、戦乱の時代では特に重用されたと思われまます。詳しい記録はありませんが、二度にわたる蒙古襲来（1274、81年）、少弐氏・菊地氏の合戦（1336年）、島津氏の北部九州への侵攻（1586年）などの大戦では、相当数の負傷者が出たことでしょう。武田信玄が川中島合戦の4ヶ月前に、負傷者の続出を想定して湯屋（山梨県・川浦温泉）の造営にあたったことからわかるように、交通の要衝にある二日市温泉は、重要な湯治場になったと思われまます。

## ■古典にみえる二日市温泉

九州には、数多くの温泉がありますが、奈良時代からの歴史を持つ温泉となると、そうたくさんはありません。ざっと列記してみましょう。（ ）内は旧名と出典です。

二日市温泉（次田『万葉集』）、柴石温泉（赤湯）、鉄輪温泉（玖倍里）、亀川温泉（浜田。以上『豊後国風土記』）、別府温泉（速見『伊予国風土記』）、武雄温泉（柄崎）、嬉野温泉（嬉野）、雲仙温泉（温泉山。



明治40年(1907)ごろの二日市温泉  
洪水で流される以前の「川湯」の姿。  
正面に見えるのは男性用の浴舎です。

以上『肥前国風土記』)、霧島温泉(霧島『続日本紀』)。

古典にみえる温泉となると、意外に少ないことがわかります。

文化7年(1810)に出版された八隅蘆菴著『旅行用心集』には、36ヶ所の九州の温泉が紹介されています。先に列記した9ヶ所のほか、山鹿・新川(平安時代)、湯浦・入来(南北朝時代)、浜脇(室町時代)、小浜・垂玉(戦国時代)などが古くから知られていた温泉です。そして、これらはいずれも九州を代表する温泉として、現在も多くの入浴・観光客を集めています。

### ■福岡県で唯一の温泉

温泉ブームの現在では信じ難いことですが、100年ほど前までは、福岡県では二日市温泉が唯一の温泉でした。林貞裕著『温泉志』(出版年不詳)、渋井孝徳著『温泉譜』(1700年代)、三宅意安撰『本朝温泉雑考』(1767年)、前出の『旅行用心集』、いずれも筑前国では二日市だけを上げています。吉田東伍著『大日本地名辞書』(1900年)には、「(湯つぼ)凡十四所、浴槽二十許、民家九十、皆浴戸なり、号して湯町と曰ふ、四時客来多し、福岡県唯一の温泉とす」と記されています。このことから、『竹取物語』



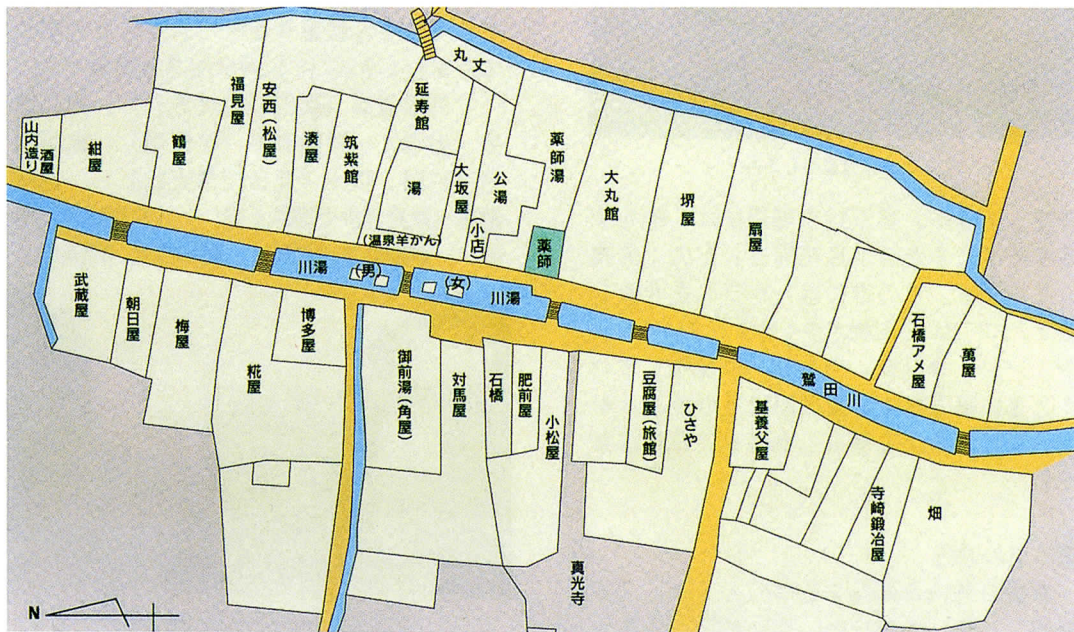
昭和10年(1935)ごろの靴屋旅館  
当時は木造3階建旅館が並んでいました。

(9世紀後半~10世紀前半)の「筑紫の国に湯浴み」、『本朝文粹』(11世紀中ごろ)の「西海温泉」、『朝野群載』(12世紀前半)の「鎮西温泉」、『本朝無題詩』(12世紀後半)の「西府温泉」など、古典にみえる筑紫の温泉の記述は、すべて二日市温泉のことであったと考えられます。(山村淳彦)

<参考>

『筑紫野市史』上巻 1999年

\*二日市温泉の名称は、昭和25年(1950)に命名されました。それ以前は武蔵温泉、薬師温泉、次田温泉(すいたのゆ)などと呼ばれていましたが、ここでは、便宜上「二日市温泉」に統一しました。



明治30年代の二日市温泉街。当時は「武蔵温泉」といわれ、珍しい川湯でした。